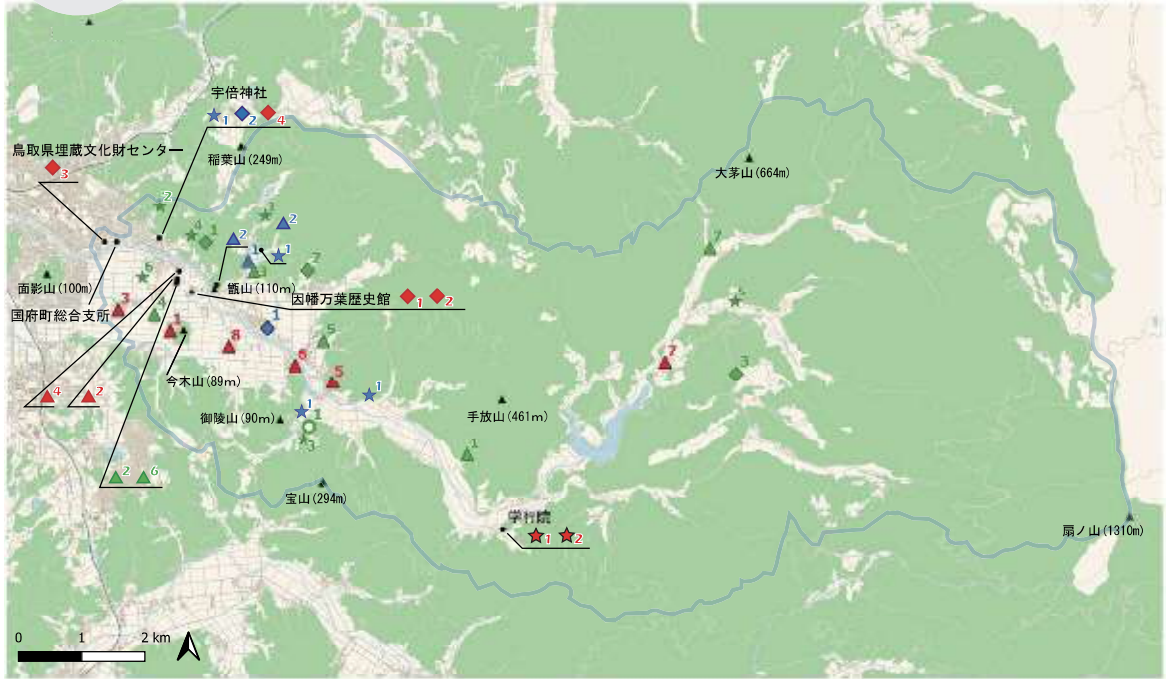




# ① 因幡万葉地域



● 因幡万葉地域の指定・登録文化財分布図

指定・登録文化財のリストはP86参照



● 国府平野



● 今木山 (89m)



● 稲葉山 (249m)



● 額山 (110m)



● 扇ノ山 (1,310m)

## 【地 勢】

この地域は、古代の因幡国の府であったとされる当時の法美郡にあたり、現在の市域の東端に位置しています。北は市内の福部町、岩美郡岩美町、東は兵庫県美方郡新温泉町、南は八頭郡八頭町、若桜町に接しています。この地域は約 80% が森林・原野、約 10% が農用地で、大部分が山間地域となっています。

この地域を囲む主な山は、東端には鳥取県と兵庫県の県境に位置し、国府を象徴する扇ノ山 (1,310m)、岩美郡岩美町との境界の大茅山 (664m)、福部町とのあいだに稲葉山 (249m)、八頭郡八頭町との境の宝山 (294m) があり、東から西に開いたゆるやかな谷地を形成しています。扇ノ山山系に源を発する一級河川である袋川は、大小の支流を集めながら東西に蛇行して流れ、流域に広がる水田を潤しています。標高 500m 以上にある上地川と大石川の 2 つの支流は急峻で深い V 字型の溪谷を形成しています。また、因幡三山として知られる面影山 (100m)、甕山 (110m)、今木山 (89m) に囲まれた国府平野は、万葉時代の景観を彷彿とさせる景色を今に留めています。

## 【歴 史】

縄文時代の遺構は確認されていませんが、遺物が散発的に出土しており、縄文時代から人々が生活していたと考えられます。弥生時代に入ると袋川流域に所在する安田遺跡から弥生時代中期の遺構・遺物が確認され、平野部を望む丘陵上には四隅突出型墳丘墓の糸谷 1 号墓が築かれています。古墳時代に入ると稲葉山の南麓や国府平野を望む丘陵上には多くの古墳群が築かれ、線刻壁画を持つ鷺山古墳や彩色壁画を持つ梶山古墳のような特徴的な古墳がみられます。

古代に国府が置かれたことにより、因幡国の中心地として中世までその役割を果たし、大伴家持や在原行平、平時範などが因幡国守として着任しているほか、この地の豪族出身の伊福吉部徳足比売が、文武天皇の采女として藤原京で仕えていました。

また、天平 13 年 (741) 聖武天皇による国分寺造営の詔により、全国で営まれた国分寺、国分尼寺の遺構や、等ヶ坪廃寺や栃本廃寺などの古代寺院の遺構が発見されています。

のちに、因幡国の中心地は鳥取平野に移りましたが、室町時代、応仁の乱以降も国府としての機能は一部残っていました。江戸時代、元和 3 年 (1617) には池田光政が鳥取藩主となって以降幕末まで鳥取藩領となります。また元禄 6 年 (1693) に没した鳥取藩主池田光仲と、以降の歴代藩主十一代と藩主夫人などが葬られている「鳥取藩主池田家墓所」が残っています。

明治 22 年 (1889) に、鳥取市が誕生すると近代化のための施設が整備されはじめ、明治 40 年 (1907) に鳥取で初の水力発電所である荒舟発電所が完成し、大正 2 年 (1913) に美敷水源地水道施設が起工され、大正 4 年 (1915) には鳥取市街までほぼ直線的に結ぶ水道施設が整備されています。その後は、美敷集落を巻き込む水害 (貯水堰堤の決壊) で壊滅しますが、石張コンクリート重力式ダムの貯水堰堤として再建され、長らく鳥取平野の市街地の水がめとして利用されました。

また、大伴家持が万葉集の最後を飾る歌を詠んだ地であることにちなみ、古代からの

歴史や遺跡を紹介し、因幡の傘踊など民俗芸能を伝承する施設として、平成6年(1994)に因幡万葉歴史館がオープンしています。

【因幡万葉地域年表】

時代	年代	できごと
弥生時代	中期	安田遺跡で水田跡が発見され、金属器等が出土。
	終末期	四隅突出型墳丘墓である糸谷1号墓が築かれる。
古墳時代	6世紀頃	鷲山古墳が築かれる。
	7世紀頃	梶山古墳が築かれる。
	8世紀頃	栃本廃寺・等ヶ坪廃寺が建立される。
古代	和銅3年(710)	伊福吉部徳足比売没す。同年10月火葬、青銅製骨蔵器が宮下に埋葬される。
	天平13年(741)	聖武天皇が国分寺造営の詔、国分寺・国分尼寺建立。
	天平宝字2年(758)	大伴家持、因幡国守に着任。
	斉衡2年(855)	在原行平、因幡国守となる。
	承徳3年(1099)	平時範、因幡国守として下向し、宇倍神社などを参拝。
中世	元龜3年(1572)	山中幸盛(鹿之助)、尼子勝久因幡に侵入、山名豊国を援けて <small>ごしきやまじょう</small> 甕山城に拠る。
	天正9年(1581)	羽柴秀吉の鳥取城攻めにより鳥取城落城。
近世	元和3年(1617)	池田光政、鳥取城主となる。
	寛永9年(1632)	池田光政、岡山へ。池田光仲、鳥取へ国替移封、鳥取池田家成立。
	元禄6年(1693)	光仲逝去、奥谷に廟所を定める。
	安永3年(1774)	<small>ほさかじへえ</small> 穂坂次兵衛ら伊福吉部徳足比売骨蔵器を発掘。
近代	明治16年(1883)	<small>あめだき</small> 雨滝街道改修工事着工。
	明治40年(1907)	荒舟発電所完成。山陰本線鳥取・境間開通。
	大正2年(1913)	美歎水源地水道施設起工。
	大正7年(1918)	美歎水源地水道堰堤決壊。
現代	昭和32年(1957)	大成村と宇倍野村が合併し、国府町誕生。
	平成6年(1994)	因幡万葉歴史館オープン。
	平成16年(2004)	鳥取市と合併し、鳥取市国府町となる。
	平成19年(2007)	殿ダム整備工事着工。(竣工は平成23年)
	令和元年(2019)	麒麟のまち圏内(鳥取市を含む1市6町)によるストーリーが、日本遺産に認定。

## 【因幡万葉地域の指定文化財と登録文化財】

※令和3年3月31日時点で、地域内にある指定・登録文化財を掲載。

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁
もの	★	1 重要文化財	木造薬師如来及び両脇侍坐像	国府町松尾 学行院	P3
		2 重要文化財	木造吉祥天立像	国府町松尾 学行院	P3
	◆	1 保護文化財	木造麒麟獅子頭	国府町町屋 因幡万葉歴史館	P19
		2 保護文化財	銅鰐口	国府町町屋 因幡万葉歴史館	P20
		3 保護文化財	豊成叶林遺跡出土旧石器時代遺物一括	国府町宮下 鳥取県埋蔵文化財センター	P20
		4 有形民俗文化財	宇倍神社御幸祭具	国府町宮下	P25
	▲	1 保護文化財	法華寺の礎石	国府町法花寺	P39
		2 保護文化財	庁の大五輪塔	国府町庁	P38
		3 保護文化財	国分寺の礎石	国府町国分寺	P37
		4 保護文化財	町屋の大宝篋印塔	国府町町屋	P39
		5 保護文化財	谷の観音立像	国府町谷	P33
		6 保護文化財	等ヶ坪廃寺跡の礎石	国府町玉鉾	P38
		7 保護文化財	楠城の道標地蔵	国府町楠城	P38
		8 保護文化財	広西の宝篋印塔	国府町広西	P39
	凡 例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定			

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁	
場	★	1 重要文化財	旧美歎水源地水道施設	国府町美歎、上町	P2	
		2 史跡	鳥取藩主池田家墓所	国府町奥谷、宮下	P7	
		3 史跡	梶山古墳	国府町岡益	P6	
		4 史跡	伊福吉部徳足比売墓跡	国府町宮下	P6	
		5 史跡	栃本廃寺跡	国府町栃本	P7	
		6 史跡	因幡国庁跡	国府町中郷	P7	
	◆	1 史跡	鷺山古墳	国府町町屋	P27	
		2 天然記念物	高岡神社社叢	国府町高岡	P29	
		3 天然記念物	菅野ミズゴケ湿原	国府町菅野	P29	
	▲	1 史跡	石舟古墳	国府町新井	P42	
		2 史跡	万葉の歌碑	国府町庁	P46	
		3 史跡	姫塚	国府町美歎	P44	
		4 史跡	犬塚	国府町法花寺	P46	
		5 史跡	糸谷古墳	国府町糸谷	P42	
		6 天然記念物	庁のムクの木	国府町庁	P48	
		7 有形民俗文化財	茅堂	国府町下木原	P41	
	○	1 登録有形文化財	林田家住宅主屋、米蔵	国府町岡益	P12	
	凡 例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録				

	No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁
こと	★	1 重要無形民俗文化財	因幡・但馬の麒麟獅子舞	国府町岡益、神垣、美歎、宮下	P4
		1 無形民俗文化財	因幡の傘踊	国府町高岡、美歎、麻生	P22
	◆	2 無形民俗文化財	宇倍神社獅子舞	国府町宮下	P22
		1 無形民俗文化財	手笠おどり	国府町美歎、神垣	P41
▲	2 無形民俗文化財	万灯	国府町町屋	P41	
	凡 例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定			

## 1. 古代因幡国の中心地・因幡国府

縄文時代に起こった大規模な気候変動による海水面の上昇によって、日本海に面する平野部は海の底となり、弥生時代の寒冷化によって海水面が低下したことで、海の底だった場所には潟湖（ラグーン）や湿地帯が広がっていきました。

市内最高峰の扇ノ山を源流とする袋川沿いに開けた国府平野は、縄文海進の影響を受けなかったことから、人々がこの地に住み始め集落を形成し、袋川のもたらす水を利用して弥生時代には稲作を始めます。豊穡の恵みにより人々の生活が豊かになるにつれ、集落の中に首長が生まれ、次第に大きな力を得て、いつしか地域を越えた交流も始まります。

3世紀頃に首長の墓として築造された「糸谷古墳」は、山陰地方を中心に見られる四隅突出型墳丘で築かれ、7世紀頃に築造された「梶山古墳」は、奈良県飛鳥地方の大王級の古墳に見られる八角形の墳丘を持ち、<sup>きりしづみ</sup>切石積の横穴式石室内には、九州地方で多く見られる彩色壁画が施されています。

この頃誕生した「因幡国」は、巨濃郡・法美郡・邑美郡・高草郡・気多郡・八上郡・智頭郡の7郡に分けられ、政治の中枢である国庁は法美郡であるこの地に置かれ、因幡国の中心地として栄えました。国守として着任し、後に『万葉集』を<sup>へんざん</sup>編纂したとされる大伴家持が、新年の宴で年頭の所感として詠んだ歌は、万葉集4516首の最後を飾るものとなりました。

また、平安時代の歌人である在原行平が、稲葉山を詠んだ「立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」は、小倉百人一首の歌として今も親しまれています。このほか平安時代に因幡国守となった<sup>ときのりき</sup>平時範が記した『時範記』からは、当時は国庁から千代川を遡り、美作国へ出て、播磨国から山陽道を経て都へ至る交通路を利用していたことがうかがえます。

江戸時代には法美往来と呼ばれていた街道は、古くから主要な街道として利用されており、因幡国に仏教が広まる古代には、街道沿いの平野部に「等ヶ坪廃寺」や「国分寺」・「国分尼寺」、山間部には「岡益廃寺」や「栃本廃寺」などの古代寺院が建立されました。また「学行院」には、平安時代の「木造薬師如来及び両脇侍坐像」や<sup>もくぞうぎつしやうてんりゆうぞう</sup>「木造吉祥天立像」などの仏像が今も祀られています。



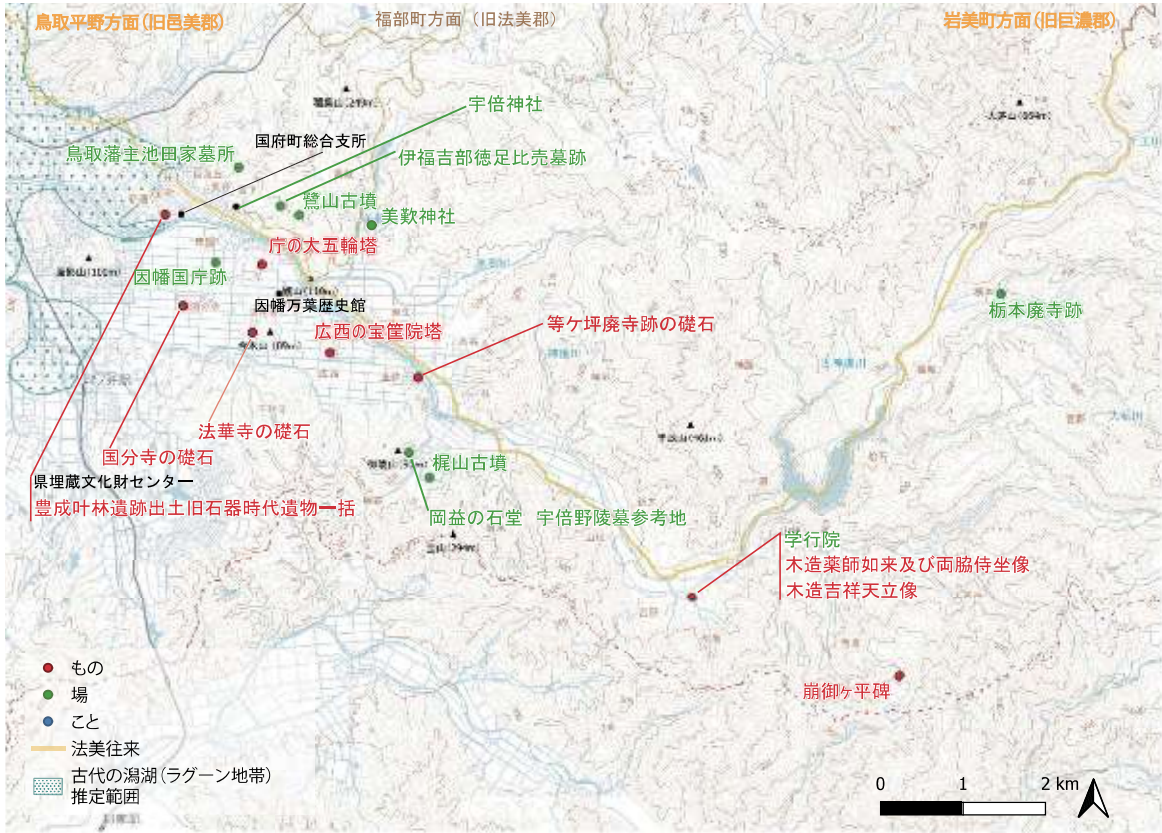
● 宇倍神社



● 梶山古墳全景(国史跡)



● 梶山古墳石室彩色壁画



● 1. 古代因幡国の中心地・因幡国府 ストーリーマップ

一方、この地の豪族である伊福吉部氏一族の伊福吉部徳足比売と呼ばれる女性は、故郷から遠く離れた藤原京に文武天皇の采女として仕えていました。しかし、徳足比売は故郷に帰ることなく都で没し、当時では珍しい火葬に付された後、故郷の国府に埋葬されました。このことは、江戸時代に発見された徳足比売の遺骨が納められていた青銅製の骨蔵器（重要文化財、東京国立博物館収蔵）に刻まれた文字から判明しています。



● 因幡国庁跡(国史跡)

また、『古事記』や『日本書紀』に記載されている武内宿禰が因幡国を訪れ、履物を残して消息を絶ったとされる宇倍野山の中腹には、武内宿禰を祭神とする因幡一之宮「宇倍神社」が造営され、伊福吉部氏が造営時から明治初期まで神職を務めました。また、平安時代末期、壇ノ浦の合戦から逃れた安徳天皇がこの地で崩御されたとされる「崩御ヶ平」とよばれる場所のほか、「岡益の石堂」が宇倍野陵墓参考地として今に伝わっています。

## 2. 万葉の歴史を彩った人たち

弥生時代終末期の「糸谷1号墳」から見晴らせる国府平野には、「因幡国庁跡」を中心として、三方に面影山・今木山・甕山と呼ばれる姿が美しい三つの山が並び立ちます。地元高岡出身の郷土史家川上貞夫は、因幡国庁が置かれた歴史と奈良の都（藤原京）の大和三山（うねびやま 畝傍山、みみなしやま 耳成山、あまのかぐやま 天香久山）になぞらえて、これらを「因幡三山」と名付けました。

この因幡三山が見渡せる因幡国庁に、天平宝字2年(758)国守として赴任した大伴家持は、翌年の新年の宴で年頭の所感として「あらた新はじめしき年の始の初春の今日降る雪のいや重しけ吉事」と詠みました。『万葉集』の最後を飾るこの歌を刻んだ高さ3m近い石碑は大正時代に当時の鳥取県知事と宇倍野村長等の尽力により建立されました。この石碑の脇には昭和39年(1964)大伴家持1200年祭の時、国文学者で歌人のささきのぶつな佐佐木信綱による家持の歌を称える石碑が添えられています。

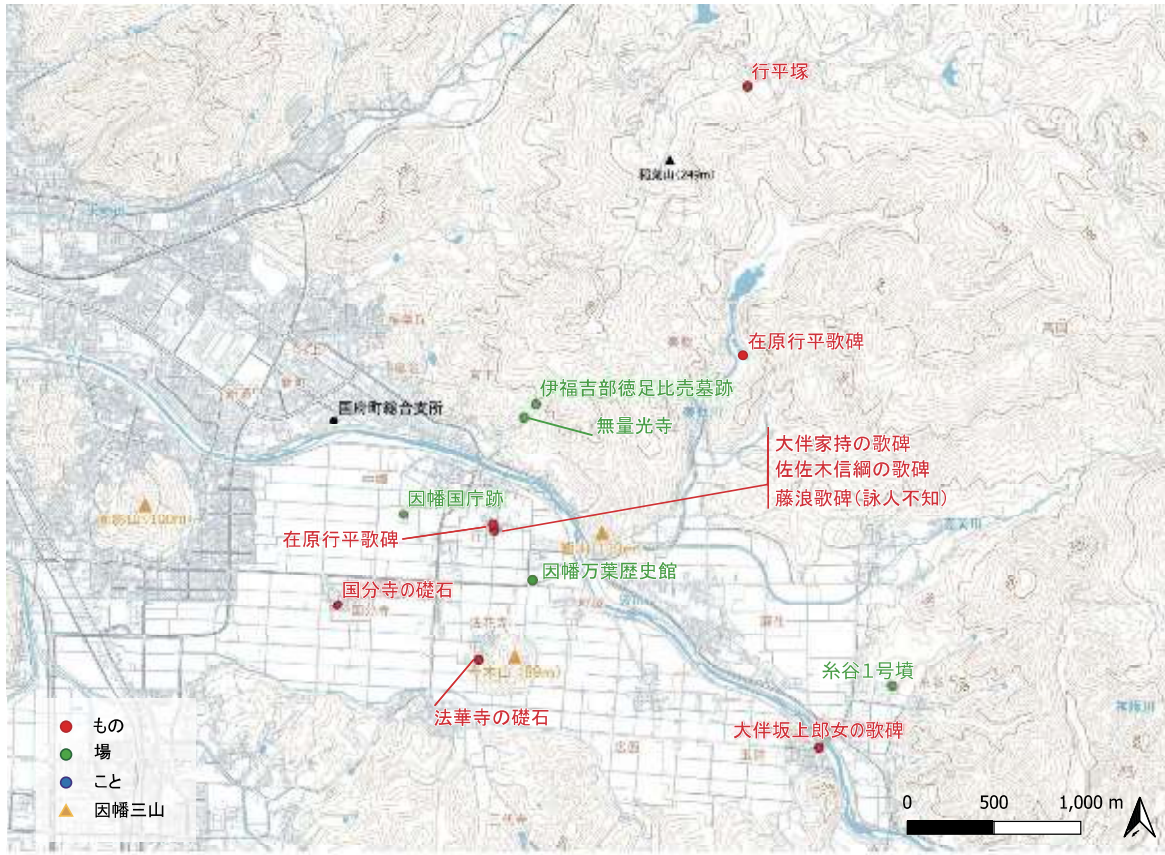
また、安永3年(1774)に無量光寺の裏山（いわつねやま 岩常山）で発見された「伊福吉部徳足比売の骨蔵器」の蓋には放射状に108文字が刻まれており、伊福吉部徳足比売という女性の飛鳥での半生と、火葬に付されてこの地に埋葬されたことが記されていました。古代から現代の私たちに宛てたタイムカプセルのようなこの骨蔵器は、国の重要文化財に指定され、東京国立博物館に収蔵展示されており、骨蔵器が発見された場所は「伊福吉部徳足比売墓跡」として国史跡に指定されています。また無量光寺は、建武年間(1334～1338)の開基とされ、伊福吉部第45代宿禰時任なる人物が仏教にきえ帰依したことにより仏堂を営んだとされています。



● 糸谷から見る因幡三山

### <コラム> 采女（うねめ）

采女とは、古代の日本において天皇（大王）の側近くに仕えた女官のことで、七世紀中頃以降、「律令」と呼ばれる法制度に基づく政治体制の中で采女制度が整えられ、有力な地方豪族の娘が天皇への服従の証としてこしん貢進されたと考えられています。伊福吉部徳足比売も、采女として天皇（大王）に仕えた女官であったと見られています。



● 2. 万葉の歴史を彩った人たち ストーリーマップ



● 大伴家持 (三十六歌仙額:部分) (県保護文化財)  
鳥取東照宮所蔵  
写真提供:鳥取県立博物館



● 伊福吉部徳足比売骨蔵器(国重要文化財)  
東京国立博物館収蔵



### 3. 豊かな森と水そして信仰

県道 31 号 (鳥取国府岩美線) は古くから人々の往来があった街道で、国府平野から袋川を遡上<sup>そじょう</sup>するように東に延びていきます。途中袋川の支流である雨滝川の合流地点から、更に雨滝川を遡上していくと、「日本の滝 100 選」に選定された雨滝 (高さ 40 m) に達します。

扇ノ山山系の豊富な水は麓で雨滝川となり、玄武岩の岩肌<sup>みずしぶき</sup>に水飛沫をあげて落下する雨滝や天を衝く巨木や湿原を育てています。ここを訪れた人々は、自然が織りなす雄大な景観<sup>いけい</sup>に畏敬の念を抱き、いつしか修験道の聖地となりました。雨滝の前には不動明王像や雨瀧神社が置かれたほか、近くには「清々しい」を語源とされる酒賀神社<sup>すが</sup>などが鎮座<sup>かやんどろ</sup>しています。また、病を癒すための祈りの場である茅堂には地蔵菩薩に健康を祈願し、耳の病の癒えた人々は穴を空けた平らな石を堂内に納めるといった独特の信仰が生まれました。

また鳥取市街地を横断し、千代川に流れ込む袋川水系の豊かな水は、山間地の棚田や国府平野の良好な田園地帯を育み、江戸時代には河川交通として使用されるとともに、近代には鳥取市の水力発電や上水道に活用され、鳥取市の近代化に大きく貢献しました。しかし、時折発生する大洪水は、流域の住民の生活に大きな被害をもたらしたため、袋川の洪水調整等を目的とした殿ダムが建設されました。



● 茅 堂 (市有形民俗文化財)



● 菅野ミズゴケ湿原 (県天然記念物)



● 河合谷高原



● 殿ダム



#### 4. 街道に残る道しるべ

袋川に沿って鳥取から岩美に抜ける街道は、因幡国庁がこの地に置かれた頃から使われていたと思われる道で、江戸時代後期には「法美往来」と呼ばれ、明治時代に入り雨滝までは雨滝街道と呼ばれるようになりました。その街道沿いには、通行する人に行先を示す道標、人々の安全を見守る地蔵や道標地蔵、また夜道を照らす常夜燈などが建てられました。そして、往時の人々が安全・安心に目的地に辿り着けるように石造物が据えられ、人や馬が行きかう時代から車に変わった現代でも、道を行きかう車や人々を見守り続けています。



● 十王峠の地蔵の祠

また街道の近くには、高さ約2mもある「ちょう だいごりんとう 庁の大五輪塔」や「まちや だいほうきょういんとう 町屋の大宝篋印塔」、ひろせ 「ひろせ 広西の宝篋印塔」など、いずれも中世から近世にかけて造られた石造物を見ることができます。



● 十王峠の地蔵



● なわしる みちしるべじぞう 楠城の道標地蔵  
(市保護文化財)

墓塔・供養塔として建立された多くの石造物には伝承や記録は残されていませんが、地域の人々の祈りの場として大切に受け継がれています。



● 4. 街道に残る道しるべ ストーリーマップ

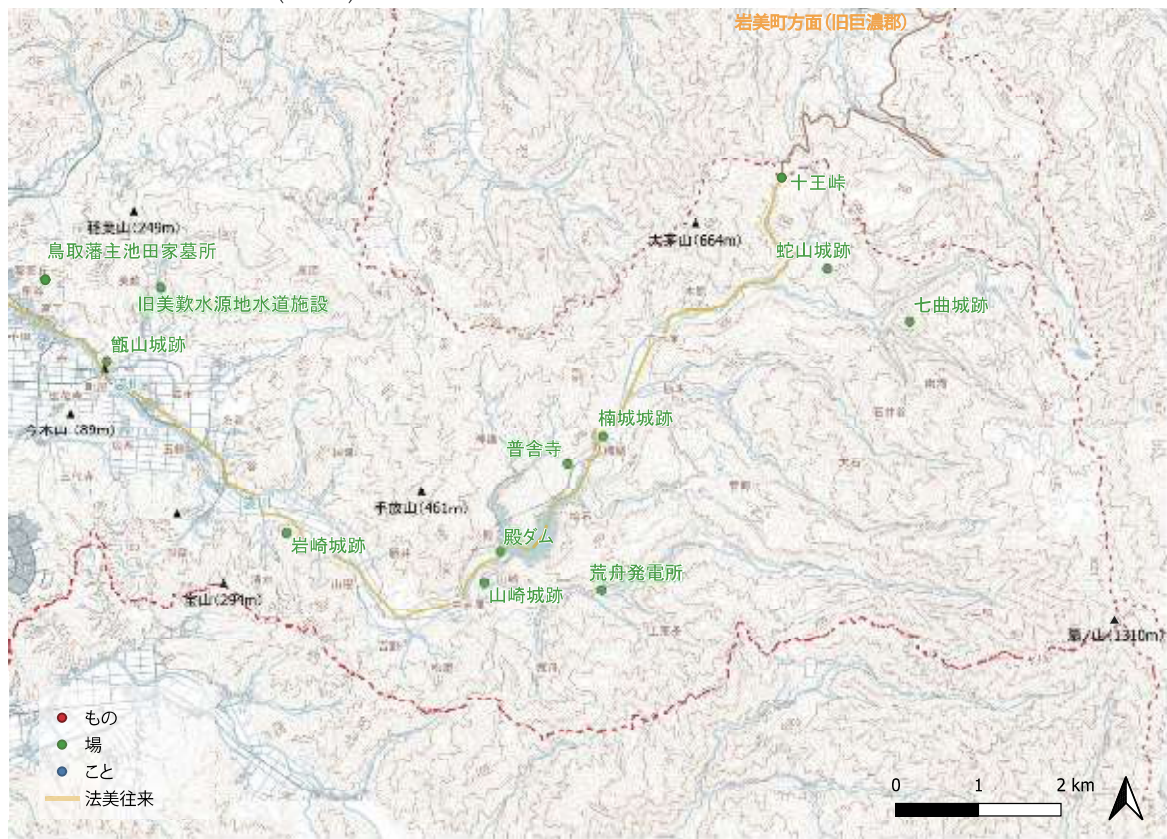
## 5. 中世山城や近代化遺産

古代因幡国の中心地であった因幡国庁周辺は、武家政治が始まった鎌倉時代に入っても、政治的な中世都市「府中」として、支配権力の拠点となっていました。しかし室町時代から戦国時代にかけての因幡国は小規模勢力が乱立する状況となり、そのため各所に「村々の山城」が築かれ、中心地は因幡国庁周辺から湖山池のほとりに移っていききました。

この中で、尼子家再興を願う山中幸盛（鹿之助）が、因幡三山の一つ甕山に築かれた「甕山城」に立て籠もり、因幡山名氏に代わって因幡国の覇権を握っていた武田高信に勝利した「鳥取のたのも崩れ」と呼ばれる戦いによって、但馬山名氏の一門である山名豊国が因幡守護としての地位を確立しました。山名豊国は、武田高信が強固な城に整備していた鳥取城を本城としたことで、以降の因幡国の中心地は湖山池周辺から久松山の山麓へ移ることとなりました。

江戸時代、初代藩主池田光仲が着任して以降230年以上続く鳥取池田家による鳥取藩政は、現在の鳥取地域の気風を醸成することとなりました。国府町奥谷にある鳥取藩主池田家墓所には、初代光仲から11代慶栄までの歴代藩主とその夫人が眠っています。また、拾石地区の普舎寺は、寺紋が池田家の家紋と同じ揚羽蝶で、経緯は不明ながら池田家藩主の位牌1基と分家の位牌1基が伝わっています。

明治に入り近代化に取り組む鳥取市は、荒舟発電所を建設し発電された電気を市街地に送り、明治40年(1907)に仁風閣等に設けられた電灯を鳥取県で初めて灯しました。



● 5. 中世山城や近代化遺産 ストーリーマップ

また上水道の整備を進め国府の美歎地区に水道施設を建設し、大正9年(1920)鳥取市街地へ給水が開始されました。

このように、因幡国の中心地が鳥取平野に移ってからも、国府は因幡国の歴史において大きな役割を果たしています。



● 鳥取藩主池田家墓所(国史跡)



● 旧美歎水源地水道施設(国重要文化財)



● 「因幡三山」のひとつで山中幸盛がたてこもった甑山

#### <コラム> 雨滝街道の改修記念碑

明治時代までの法美往来は、狭く険しい道で交通に難儀していたため、土地の人がこれを改修することになり、沿道の40の村の村民たちが費用を搬出して明治16年(1883)に法美郡立川村(現鳥取市立川町)の立川大橋から工事を開始し、明治22年(1889)但馬美方郡千谷村(現兵庫県新温泉町)に達して工事を終わりました。明治30年(1897)より県道となり、翌年6月これを記念して「開修雨瀧道路碑」が、谷地区中央に建てられました。

● 開修雨瀧道路碑

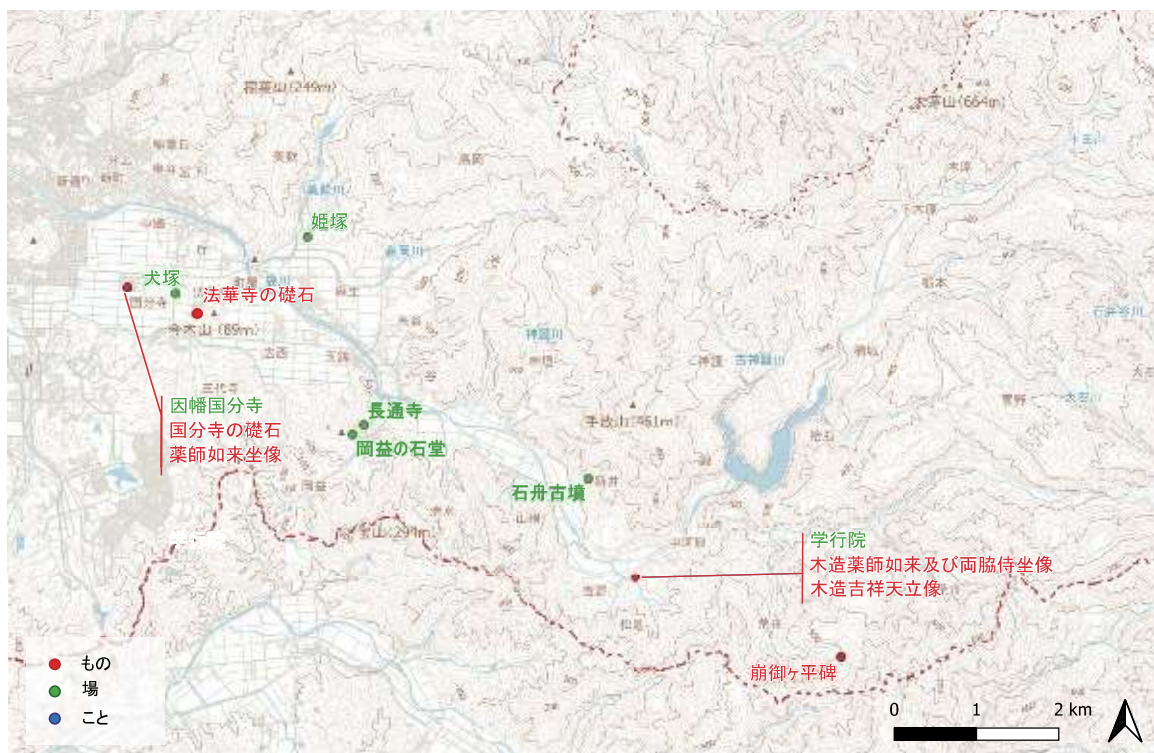


## 6. 古代からの伝承

因幡国が誕生した時、この地域は法美郡に属し、因幡国の中心地として因幡国庁が置かれたことで、古代から多くの伝承が残っています。

7世紀頃に仏教が因幡国に伝わり、和銅年間(708～715)には薬師如来を本尊とする花慶山光良寺が営まれたとされています。この寺には莫大な財宝が眠るといわれ、この噂により戦国時代に寺は荒らされたと伝えられています。村人たちは残った薬師如来坐像他3体の仏像を粗末な土堂つちどうを建てて安置したことから、土堂薬師と呼ばれるようになり、江戸時代の富豪であった紹慶と修験者の覚行かくぎょうが小堂しょうけいを建て、この仏像を安置したのが現在の学行院がくぎょういんといわれています。学行院の仏像は、大正元年(1912)鳥取市で唯一国の重要文化財に指定された仏像として現在に伝わっています。

天平13年(741)聖武天皇の「国分寺建立の詔みことのり」によって、全国に建立された国分寺と国分尼寺が、この地域に建立されました。現在、国分寺の礎石が残る国分寺集落は、発掘調査により国分寺の寺域が確認されているほか、同地区内には江戸時代に堂宇を再建した国分寺ぎょうきがあり、行基ぎょうき作と伝わる薬師如来像を本尊としています。また法花寺集落には、国分尼寺の礎石といわれる法華寺の礎石が伝わっています。その中間地点に残る犬塚は、江戸時代この地域の大庄屋が、国分寺と国分尼寺の両方に飼われていたとされる犬の伝承から石碑を建てて供養したというものです。その犬は、朝晩の食事どきに国分寺と国分尼寺が鳴らす鐘の早い方へ行っては残りものの飯を食べていましたが、ある時、両寺が示し合せて同時に鐘を鳴らしたところ、犬はどちらに行こうか迷って両寺の中間で倒れて死んでしまい、哀れに思った国分寺の僧や国分尼寺の尼僧たちが犬を葬ったとされています。



● 6. 古代からの伝承 ストーリーマップ

また平安時代末期の壇ノ浦の合戦から逃れてきた安徳天皇は、平時子（二位の尼）と共にこの地に落ち延びて荒舟で崩御され岡益の石堂に安置されたとされ、その石堂の麓にある長通寺は、安徳天皇の御霊を弔うために営まれた草庵が起源とされています。

その後、岡益の石堂は、第10代長通寺住職牛尾得明及びその他の人々の奔走により、宮内省に上申され明治29年(1896)宮内省所管の宇倍野陵墓参考地に治定されました。この長通寺本堂内には本市出身の画家、八百谷冷泉の襖絵が飾られ、庭には志賀直哉来訪記念の「妙」と彫られた石碑が建てられています。



● 学行院 木造薬師如来及び両脇侍坐像  
(国重要文化財)



● 岡益の石堂

#### <コラム> 岡益の石堂と岡益廃寺

宇倍野陵墓参考地とされている岡益の石堂は、我が国において他に例のない構造を持つ石造物で、約6m四方の基壇の上に40cm前後の厚さの壁石で石室を造り、その中央に柱礎を置き、その上にエンタシス（胴張り）の円柱が建ち、さらにその上にマス型の中台を乗せています。中台には、古代中国大陸の仏教文化の影響を色濃く残す忍冬唐草文が刻まれています。

この石堂に見られるエンタシスの柱は、奈良・法隆寺廻廊（国宝）の柱などに見られ、また忍冬唐草文は法隆寺の瓦や玉虫厨子（国宝）などに用いられています。

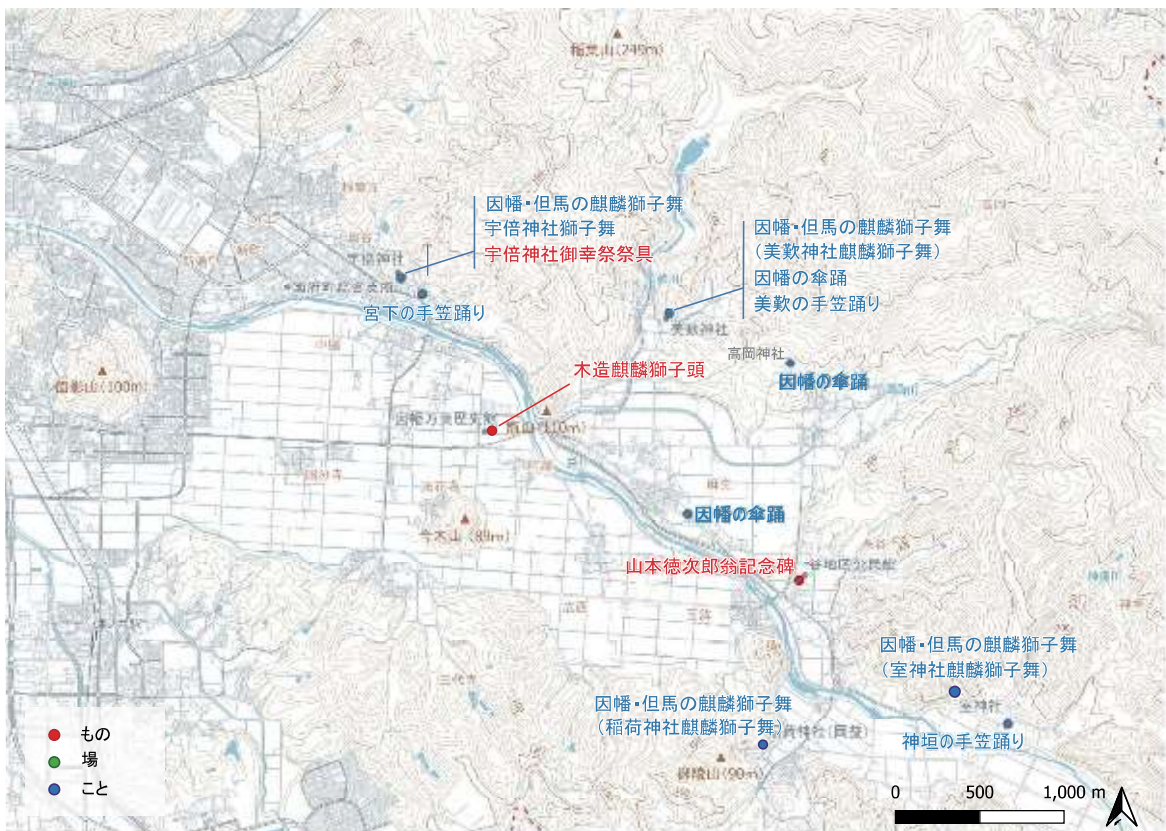
このような石造物をいつ、何のために作ったのかは分かっていませんが、石堂の周囲の平地は岡益廃寺跡とされており、古代寺院の礎石やこの地域の等ヶ坪廃寺と同じ形式の瓦が発見されており、石堂との関連性がうかがわれます。

## 7. 因幡を代表する祭りと踊り

宇倍神社は、毎年4月20・21日に「例大祭」が執り行われ、神輿や大名行列が練り歩き、神前では麒麟獅子舞が奉納されます。大化4年(648)創建とされ、因幡一宮として古代から崇敬されてきましたが、戦国時代に兵火により一旦衰退しました。しかし、江戸時代に入り、鳥取藩主池田光仲の庇護を受けて再興し、元禄6年(1693)には神輿も復元され、祭礼も復興されました。現在も「宇倍神社御幸祭祭具」は、県の有形民俗文化財として伝わっています。因幡万葉歴史館では現存する県内最古の麒麟獅子頭が公開されており、室町時代の制作と推定される木造麒麟獅子頭は岡益の稻荷神社に奉納される獅子舞に使用されていました。このほか、宇倍神社の麒麟獅子舞は、失われた鳥取東照宮祭礼の舞い方を色濃く残しており、地域の人たちに大切に継承されています。

また、明治時代にこの地域で流行った博打に溺れた若者を憂いた地元高岡の山本徳次郎は、江戸時代末期に始まった雨乞いの踊りとして伝わる手笠踊りをヒントに、若者の更生を願って「因幡の傘踊」を創作しました。その勇壮な踊りに若者達は驚き、傘作りと踊りの練習に熱中しました。やがて衣装も整えられると、高岡の氏神で古くから牛頭天王として崇拝されていた高岡神社に奉納し、「因幡元祖傘踊牛頭天王」の旗を拝領され、隣村まで出かけて踊るようになります。

踊りは徐々に広がりを見せ、市内に特設舞台を設けて技能審査を行うまでに至りました。昭和22年(1947)の昭和天皇の山陰道行幸の際に天覧の栄光に授かると、県外から



● 7. 因幡を代表する祭りと踊り ストーリーマップ



の出演依頼が届くようになります。山本徳次郎の若者を憂う気持ちは実を結び、若者たちの踊りは鳥取を代表する踊りと認知されるようになり、昭和45年(1970)の大阪万博に出演し、一躍全国に知れ渡るようになりました。これを契機に有志により「国府町因幡の傘踊り保存会」が結成されると、昭和49年(1974)に鳥取県を代表する民俗芸能として鳥取県の無形民俗文化財に指定され、国府町は「因幡の傘踊<sup>びばい</sup>発祥の地」と呼ばれるようになりました。また因幡の傘踊は、移住した人々によって北海道にも伝わり、美唄市・<sup>みかさ</sup>三笠市で受け継がれています。



● 山本徳次郎翁之碑



● 雨滝と因幡の傘踊(県無形民俗文化財)